

環境事始 十四帖 ゴルフ場の自然破壊

横浜国立大学 名誉教授 加藤 龍夫

全国山野破壊勝手たるべしのリゾート法が施行されて、こっそりなら別として町も村もゴルフ場開発ブームとなって、スポーツが犯罪に転化した。日本は元々草原の平地ではないから、山を削り川を埋め森林を伐り払い、その上除草剤殺虫剤を撒くゴルフ場は、明々白々たる環境破壊。そのため地域の保水能力がなくなり、事実旱魃洪水の誘因となった。かつて記録になかった那珂川の氾濫はその所為である。当然のことで各地で賛成反対の大騒動となった。半休先生は両者伯仲の町から救援の依頼があつて、ゴルフ場を阻止する側に立って調査、講演に出掛けた。測るのは大気中の農薬濃度である。芝に撒いた農薬は揮発して特にゴルフ日和の日差しの暖かい無風の日は高濃度を示した。つまり毒ガス日和という訳。だから太った社長、官僚がプレイ中頓死するのは自業自得だし、キャデイの姐ちゃんが体調を毀すのは職業病で、利口な犬は決して近寄らないのだ。それは兎に角これも歴史の一駒、見聞した有様を披露しよう。青森県恐山にゴルフ場の計画があつた。地元の漁業組合が反対して漁船四百艘で海上デモをして氣勢を挙げる。県は説明の講演会を開き、先生はその席に出席したのだ。市内の会場に行き組合長に紹介された。枯れ木の如きお爺さんだが凜として威厳を俱えて見えた。その筈で、原子力船むつの母港を湾内から津軽海峡外海に追っ払った張本であつた。講演の前に県から申し出があると。1、先生の前に県の役人が話す。2、その説明に質問は許さない。3、説明が済んだら直ぐに帰るの以上三点。先生はどうぞお好きなようにと笑つて応えた。最初から県は及び腰で戦意はなかつた。一体誰のためのゴルフ場だったのか。今度は本州西端の山口県の話。この時は連ちゃん、初日柳井市でやり、途中一泊して豊浦町に向かった。夜半雨の音を耳にした。この日町長は細工して、町主催の運動会か何かぶつけて町民が先生の講演会に集まらぬように画策した。ところが朝からの大雨である。町民は予定が狂って行き場がなく、皆んな先生の講演に集まって来たからさあ大変、聴衆が入り切らなくて急遽大会場に変更する騒ぎとなった。これを神雨とでもいうのかな。何れにしても日本各地ご苦労な仕儀だった。講演の後は大抵反対派の市長が当選した。しかし当時ダムや堰やゴルフ場やスキー場を狸の皮算用で造成した町は財政負担で苦しみ、中止した町が損を免れたのは確かである。先生はこのような構想を無下に嫌つたのではなく一旦失ったら掛替えのない環境の破壊を憎んだのであつた。江戸時代に悪政あり善政があつた歴史を読み聞かすが、昭和時代も全く変らな

い。或いは今後も続くかも知れない。半休先生はゴルフをせず、車を運転せず、携帯を持たず、飛行機に乗らず、煙草を吸わず、新聞を取らず、築六十年の雨漏りの家に暮らしている。みんながそうだと市は栄えないだろう。しかし反対に誰もがゴルフをし、海外旅行し、先物投資し、詐欺をしていたら国は滅ぶだろう。小人閑居して不善をなすとは古今の名言。暇と金ができたから環境破壊に手を出すのではあまり上等な趣味とはいえない。それでは食料が豊かになって肉を食い過ぎて糖尿病に罹り寿命を縮める愚と変わらないと思う。先生は以前ゴルフは卑猥な格好で棒を握り玉を穴に入れる下品極まりないと毒付いたことがあるが、余りにも理不尽な自然に対する凌辱行為を嘆いたからであった。